

Fukapon

絵: だれもない

セレクトティブ・
チョコレート

第一章「甘くなく辛い」コートの秘密

「シノン、はい、これ。」

手渡された十センチ四方の包みには、ちよつとした重さがある。落ち着いた赤の包装紙に、深い緑色のリボンが十字に結ばれているそれは言うまでもなく。

本日は二月十四日の木曜日。バレンタインデーだ。つまり、チョコレートか、まあ、その類のものつてこと。

「お、ヒメ、ありがと。」

「じゃあ私は部活あるから。またあとでね。」

「んー、行つてらっしゃーい。」

後ろの扉から教室を出るヒメに、椅子に座つたまま背を反らした格好で手を振つた。義理と言おうか、なんと言おうか。仲良しなんだし、渡してもいいでしょと毎年くれるチョコレートは、案外嬉しかつたりもする。

「おいこら、お前はまたこんなものを人前でもらいやがつて。

恥ずかしいのか？　つか、羨ましいからやめろ。」

背を反らしたままで無理な体勢の俺から、ひょいと包みを奪い取つたのは高崎和人（たかさき かずと）。去年からのクラスメイト、そして昨夏の補講で意気投合して仲良くなった友達だ。補講で、というのが大変情けない思い出はあるが、さすがは補講だ。こうして一年後を楽しく過ごす友を与えてくれた

のである。俺に足りないものは、友達だったんだな。うんうん。「返せよ。お前だったら別に、人のを盗らなくなつてもらえるだろ。」

そうなのだ。高崎は細身の長身、脳天気それでもあるがちょっと鋭いルックス。女の子受けしように思えてならないのだが、本人曰くさっぱりらしい。

「まあな。確かに俺様が本気になれば、こんなものの十や二十、あつさりと同収できるわけだが。残念ながら今年もその気にはならなかった。それだけのことだ。」

現実にはさっぱりだが、ポテンシャルはあると言い張る。実際そう見えるから、あまり反論もできないわけだが、言つていてむなしくないのかなあとは思ふ。思うだけでなく顔に出ているのだろうか、涼しい顔で高崎が反撃してきた。

「しかしシノンも、女の子顔負けの可愛さでお姉様方から大人気になりそうなんだけどな。やつぱ、中身が可愛いのがばれてるのか？」

うるさい。うるさいぞ。

言うとおりなんだが……。女の子顔負けかはさておき、中性的な顔つきで悔しいが可愛い顔。そして、平均をわずかに下回つてしまっている身長。おかげでヒメとはとんとんだ。みんなから「シノン」と呼ばれる俺の、東雲忍（しのぶ）の外見上の特徴はそんなところ。

「余計なことを言つてないで返せ。ヒメがせっかくくれたんだから。」

「はいはい。どーせヒメが見ているのはお前だけだからね。チョコだけ奪っても仕方ない、返すよ。ほれ。」

背を反らしたまま伸ばした手に、ポンと包みは戻ってきた。

「そうだ、お前が持ってたって仕方ないもんだからな。」

「んだな。じゃ、俺は部活行くから。また明日な。」

「ああ、またな。」

とっとと帰るか。特定の部に属することのない、要は帰宅部の俺にはここにとどまる理由なんかない。

背もたれに引っかけていたジャケットを羽織り、ポケットにもらったばかりのチョコを入れ、左肩に何も入っていない通学鞆を引っかけ。バレンタインデーの放課後だというのに、そんな雰囲気はまるでない。部活に行くもの、帰るもの、全くいつも通り、三々五々教室を出て行く。これが普通なんだろうな。やっぱ現実には甘くないかと、俺は教室をあとにした。

すでに暗くなり始めている帰り道、人の溢れるプラットホームから逃れるよう電車に乗り込む。俺の乗る電車は空いている方向だから、まだちらほらと空席もある。ちょうど空いていた目の前の席に座り、何の気なしに車内を見渡した。項垂れて寝ている人、イヤホンを耳に音楽を聴いている人、本や新聞を読んでいる人。いつも通りの光景。右端から順に見渡して、左端で終わろうとしたとき。あるところで視線を掴まれてしまう。甘い現実も、あるんだな。

おそらくは高校生だろう、それにしても随分と幼いというか、

真つ新たな感じのする男女。腕を組むでもなく、手を繋ぐでもないけれど、お互いが特別な距離にいる微妙な雰囲気。今日の告白の成果を物語っている。うまくいったんだと、微笑ましく思う。

二人をばかーんと眺めていると、ふと気付いた。あの女の子、ヒメに似てるな。小さな身体や、長い髪はまるで反対。あんなに可愛らしく立っていることもあり得ないんだけど。なんて言ったら怒られるか。楽しそうな笑顔が、そっくり。

俺たちが「ヒメ」と呼んでいる、春日朱姫（かすが あき）は俺と同じ年の高校二年生。現クラスメイトで、いわゆる幼馴染みだ。家を通り向かいなので、幼稚園の頃から仲良くやってくる。ちなみに「ヒメ」って呼ぶようになったのは小学生の時。朱姫の「姫」をヒメと読むんだと習ってから「ヒメって呼びなさい」と言い出し、彼女はヒメになった。

長年友達やつてるから鼻真目が入っているのかも知れないが、素直に評して彼女は可愛い。底抜けに明るく天衣無縫、いつも大きな瞳を輝かせ笑顔でいるヒメ。可愛らしさこそ異にはするが、誰にでも好かれる様はお姫様に通ずるものがある。

故に男子生徒にも人気があって、視線の先の二人みたいに、今頃誰かと一緒にいてもおかしくないぐらいだ。むしろ意中の男がいれば、受け入れてもらうのも難しい話じゃないだろう。そんな彼女がだ。なぜか俺なんかとつるんで、バレンタインデーどころか、去年のクリスマスも一緒に過ごしている。

はあ。高崎やヒメを見ると、俺如きに彼女ができないのは至極当然な気がしてきて、バレンタインデーは暗くなる一方だな。俺だって綺麗なお姉さんと幸せなひとときを送りたいんだが、絶対無理。それは仕方のないことだよ。はあ……。

ちなみにヒメは一時期、下級生とつきあっていたことがあるが、「お姉様するのは無理だった」とか言って別れた。その惨劇はあろうことか、去年の十二月二十三日、クリスマスイヴの前日。相手が可哀相すぎて、俺は思わず涙したよ。

結局、途中で告白の待ち伏せに遭うこともなく、あつさり帰宅。それが当然なんだと電車の中で改めて悟ったばかりだし、今更残念に思うようなことでもないか。

自室へ辿り着くと、ぼふつと背中からベッドに倒れ込む。俺は改めて現実を噛みしめ、ひよいとポケットの中から取り出した。ヒメからのプレゼント。

「あいつ、甘いもの嫌いなのに。」

毎年「イベントは楽しまなくっちゃ」と本当に楽しそうにくれるけど、作るのは結構大変なんだろうなあ。ぼーっと小さな包みを仰いでいたら、妙な違和感が湧いてきた。ん？ 去年って何もなかったっけ？

「あ、そうだよ。チョコレートケーキ。」

そうそう、ここ数年は大きなチョコレートケーキを丸ごと一つくれてたんだよ。それもわざわざ学校に持ってきて、放課後に。「この方が嬉しいでしょ？」と言うヒメに、俺は「バカか」

って言い返した。照れ隠しというか、まあ、そんな感じのつもりだったけど……。バカは言い過ぎたのかなあ。小さくなったプレゼントに申し訳なさを感じながら、リボンをほどいた。

すると、はらりと落ちる紙一枚。メッセージカードまでは省略されなかったらしい。このメッセージカードも困った逸品で、毎年「好きだよ」とかわざわざ書いてある。嬉しくないわけでもないんだが、まあ、そりゃ何だ、その場で素直にありがとうとは言えないんだよ。「署名がヒメじゃなければ嬉しいんだけどね」とか、去年もろくでもないこと言ったなあ。毎年すぐに後悔してその日の夜にでも謝ったりするくせに、毎年改善されない俺の憎まれ口は何とかならんもんかね。可愛くないよな。胸元に落ちたカードを拾い上げ、二つ折りになったそれを開く。いつも通り「好きです」と書いてあって、その下に。

「お返事はあとで聞かせてください。もしよければ今週の土曜日、駅前の桜の木の下で待っています。」

……はいい？ これ、ホントにヒメが書いたのか？ 予想外の展開に慌てずにはいられないが、落ち着け落ち着けとカードを読み返した。……ん？ ああ、あー、そうだ、ないよ、ヒメの名前が。と言うかこの手紙、名無しだぞ。

ヒメの名前がないことで驚きはだいぶ緩和されたわけだが、今度はいったい誰が？ という疑問が残る。ヒメが俺に渡した事実がある以上、可能性が残っていないくもないあたりがドキドキだ。想像したくない。

いや、落ち着いて考えよう。そうそう、さつきまで考えてい

たことを思い出せばいいだけだ。ここ数年の傾向から考えるに、これがヒメのプレゼントじゃない可能性も十分にある。よってヒメの告白である線は薄い。と言い切ろう。じゃあ誰だ？と堂々巡り。あーヒメに聞こ、それが一番だ。

部活中に電話をするのも悪いので携帯にメールを入れておいたところ、案外早く、数十分後には返信が送られてきた。「廊下を歩いていた下級生からもらった」そう。そういう大切なことは、ちゃんと伝えてくれよ。つた、無駄にドギマギしちやったよ。あ、待てよ、これはこれで大変なことだな……。下級生から、告白された。のか……。

制服姿のまま俺の部屋に乗り込んできたヒメは、放課後の一件を氣にした風でもなく、トンと大きな箱を置き去りにし「ちよつと待っててね」と言いながら部屋を出て行った。目の前の、ガラス天板のテーブル上に置かれているのは見るからにケーキ入りの箱。つまり、ヒメがチョコの差出人を言い忘れたことに加え、今年はヒメが放課後にプレゼントすることをやめたことで俺は慌てる羽目になったという落ちか。

……放課後のプレゼントが見送られた原因には、心当たりがある。包丁や食器を手に戻ってきたヒメは、笑顔を輝かせてケーキを綺麗に等分している。こんなとき、いつも通りの笑顔でいられると逆に気まずい……。なんて言ったらいいものか……

……。あーつ、もうつ、うだうだ考えてないでちゃんと謝れば済むことじゃないか。

「ごめんつ、ヒメ。その、何だ、いつもプレゼントありがとな。」

「……どしたの？ シノン。」

意を決して言葉を発した俺と、呆然と動きを止めるヒメ。あれ……？

「違う違う、たまたま忘れちゃっただけだよ。」

「そうだったのか……。」

俺の反省は大きな誤解に基づいていたらしく、単純にケーキを学校に持って行き忘れたのか。うあつ、なんか凄く恥ずかしいぞ。どうしたもんかと視線は宙に泳がせ、その端ではヒメの笑顔を捕らえる。俺の挙動を楽しむかのような笑顔を、まじまじと見ることはできないからなあ。

「でも、嬉しいな。やつぱり言ってもらえると、凄く嬉しいよ。」

「そ、そうか、ならよかった。けど、恥ずかしいな、これ。」

まだちよつと視線を外しながらも、俺も笑い返した。

結局勘違いだったのが心の棘も抜けたところで、例のチョコの差出人について聞いてみた。

「ごめんごめん、すっかり言い損ねてたね。あ、はい、ケーキをどうぞ。」

ヒメは応答しながら、小皿に分けたケーキを俺の方に滑らしてきた。

「ん、ありがと。それでどんな子だった？ 名前は？」

「可愛い子だった。名前は知らないよ、だって『渡してください』って言うてすぐ行っちゃったもん。」

答えてはくれているが、この話には興味が無いのかな。ヒメはフオークを小さくもてあそんでいた。……あ、俺はまたやってしまったのか？　いくら幼馴染みからとは言え、バレンタインデーにもらったケーキを頬張りながら、他の子からの告白について話さなくて、それはいくら何でもまずいだろ。

「あのさ……、ごめん。」

そして歴史は繰り返し、俺はまた笑われ、俺はまた勘違いに気付くことになる。

「笑いすぎだろ、ヒメ。」

「だって、そんなこと気にしてるシンノンなんておかしいもん。でもほら、さっきと同じ。私は凄く嬉しいよっ。」

その笑顔に俺が困っているのを知ってか、視線を下に向けてケーキを小皿に分けている。そして、再びケーキを俺の方に滑らせてきた。

「細かいことは気にしない、気にしない。たくさん食べて食べて。それでその子なんだけど、リボンの色が青だったから、一年生なのは間違いないよ。」

なるほど、それで下級生とわかったのか。俺の通う高校は学年によって男子はネクタイの、女子はリボンの色が違う。ちなみに俺たち二年生は赤。

「他に、んー、そうだ、身長とかは？」

「私よりは低かったけど、それって普通だもんねえ。それ以上は何もわからないよ。」

まあ、突然渡されたんじゃないかな。相手はわかるだろうと期待していたわけでもないの、この話はさておくことにしよう。何にしろ一番重要なのは、このメッセーজカードだ。

「お前ならこれ、どうする？」

俺がメッセージカードを差し出して聞いてみると、ヒメは紅茶をすすりながらさもありませんと答えた。

「行くに決まっているでしょ。女の子を待たせるのはいけないんだよ。」

「とは言え、相手の名前も顔もわからないんだぞ？」

「相手はシンノンのことわかってるんだから、見つけてもらえらんじゃない？」

「いや、そういう問題じゃなくて……。」

この寒い中、葉っぱすらない桜の木の下に突っ立っているヤツなんていないんだから、見つけるのは俺にだってできるっての。そうじゃなくてだな。

「返事をどうしたらいいものか……。」

初めて会う好きでも嫌いでもない相手に、いきなり告白の返事するのは難しい。見た目の可愛さだけで、つきあうか否かを決めるのも可能だとは思うが……。それは道徳に反すると言うか、御法度と言うか、やっちゃいけないだろう。

「そう言えはいんじゃない？　わからないって。嫌いって言

われたらシヨックだけど、わからないなら別に、そうだよな
 と思う。がんばろうって思うよ。」

ティーカップに視線を残したままヒメは答えた。これは親身
 になつて考えていない。間違いないぞ。でも、言うとおりで
 思えたので、あえて反論するのはやめよう。

「そんなもんか。」

「そう、そんなもん。だから、ねっ、がんばれっ。」

勢いのいいヤツだが、いつでも即決即断というわけではない。
 ヒメは優柔不断であることも多い。その上、裏表がなく、素直
 すぎる。だから迷いはすぐに顔に出る。今もそんな顔をしてい
 る。

しかし他に名案があるわけでもなく。ヒメの言うとおり、無
 視をするよりはちゃんと返事をしてあげた方がいいな。

「わかった。そうするよ。」

となると流れから必然的に、一応デートなんだから何着てい
 こうかとか、そんな話になった。

「よろしくね、詩音。シノンをはっちりコーディネートしてき
 てやって。」

「任せてください、部長。この詩音、ダメダメな東雲先輩を完

璧なデート仕様に仕立ててご覧に入れますよ。」

え、俺、ダメダメなの？

「おー、さすがは詩音先生。これはお供せざるを得ませんな。」
 「よいぞよいぞ、高崎君、しつかりアシストしてくれたまえ。」
 え、高崎も来るのかよ。

昨晚、結局ヒメは「服選びなら私より適任がいるよ」と言い
 だし、適任者には早速約束を取り付け、この放課後に買い物に
 行つてらっしゃいと相成つたわけだ。早速とは言え待ち合わせ
 が明日である以上、今日が最後のチャンスでもある。これは一
 大事と、ヒメは部長権限で後輩を休ませ、人員投入してきたら
 しい。ありがたいような、迷惑なような。

俺をどうにかするという任を仰せつかったらしいのは、弓削
 詩音（ゆげ うたね）。あどけないながらも綺麗な顔立ち。ウ
 エーブのかかったロングヘアが大人への階段を上らせている感
 じで危うい雰囲気満点。一年生ながらメリハリのきいたスタイ
 ルも、彼女を「美人」に仕立て上げている要因の一つだろう。
 小さく細身であるが故、余計に際だつサイズの胸につい視線を
 向けてしまう。なるほど、高崎の言うことももっともらしい。

「詩音はすげーモテるぞ。ま、こいつの太鼓判をもらつておけ
 ば、大きくは外さないから安心しろ。」

俺がなぜこの子なんだ？ と一応聞いたときに、高崎はそう
 答えていた。しかしなぜ、高崎がこの弓削さんと親しいのかは
 謎。二人の会話から友達らしいことは知れるが、どうして友達

になつてゐるのがわからない。

「いろいろありまして。高崎先輩とは並の友達じゃありませんよ？」

荒縄で結ばれていますからと想像したくないような話が飛び交っているうちに、目的地へと到着。今に至っている。

「さて、と。まずは高崎先輩のお手並み拝見と参りますか。」

高校の最寄り駅から電車で二駅先にある、駅ビルのファンシヨンフロアに俺たちはやつてきた。そして早速、俺はマネキンにされているわけである。

「おいこら、こんなもん着られるか、ボケ。」

高崎のあまりに興味の悪いチョイスに、当然反論する俺。と言うか、このフロア、違うよな……。

「わかつてないなあ。お前の可愛さを生かすのは絶対この服。ロリータファッションは今や市民権を手にし、全然奇抜な服じゃなくなっているのだよ。」

揺るがぬ主張で俺を攻める高崎。もはや己の信じるものにまつしづらな様子。

「確かに。一度着てみて欲しいかも。」

高崎に同調する、弓削さん。

……うあ、こら、やめい。うあ、あーなんで弓削さんが一緒に更衣室入ってくるの？ あううつ。

「詩音先生、これは想像以上ですね。」

「いやはや高崎君、さすがだねえ。これほどまでとは、よくぞ見抜いた。」

「……くすん。」

無理矢理鏡を見せられると、とても可愛い子がそこに……。可愛ければ可愛いほど、俺の胸には暗澹としたものが広がっていくのだった。

「とは言え、これで待ち合わせ場所に来たら、女の子としてはどうですかね？」

「そんなことを言わせるでない。引くに決まってるであろう。もちろん迷わず通報。」

ひ、ひどいよ……。

結局一人じゃ脱ぐことすらできず、再び弓削さんと更衣室に入り脱がしてもらうという屈辱を味わった後、本題の洋服選びはあっさり完了した。何を相談するわけでもなく、弓削さんがちゃっちゃと服を選んできた。サイズがぴったりだったことには感心しきりだ。

早速着替え、鏡の前に立つと高崎は一言。

「こんなんでもいいのか？ 詩音らしいけどな。」

そう評されたコーディネートを鏡に映して、俺自身、こんなもんなのか？ と思つている。上はタートルネックのシャツに、テラードカラーのジャケット。下は何のことはない普通のチノ。色はシャツがオフホワイト、他は黒。かつこいい人が着ればいいんだろうが、俺が着ても微妙なんじゃ……。

「いいんですよ、これで。清潔感があつて、だらしなくなければ本当はどんな格好でもいいんです。」

目の前の弓削さんは、うんうんと満足そう。高崎も「まあ、そうだな」なんて言ってる。

「着飾ったって、メッキはいつかはがれますから。それに勇気を出して好きって言ってくれた人とのデートなんです、本当の自分を見せなくちゃダメです。」

理解できていないことを俺の顔から読み取ったのか、弓削さんは言葉を加えた。こんなに綺麗な子に言われると、それで間違いないような気がしてきた。

「ふうん。じゃあ、これにしようか。また変なものを着せられる前に帰りたいしな……。」

俺が放った一言は、確実に余計な一言だった。神様、助けて……。

二対一で明暗くつきの三名様ご一行がビルを出ると、もう外は暗くなっていた。なんか、疲れたなあ。

「東雲先輩、今日はどうもありがとうございます。貴重なものが見られました。」

「いやあ、ホントだね。またつきあえ、シノン。」

こいつらに服を選んでもらうことは、もう二度とないな。あつてはならない。

「またはないからな。でも、今日はありがと、二人とも。おかげで助かったよ。」

「どういたしまして。じゃあ、明日はがんばってくださいね。」
「うまくいったら感謝の気持ちを態度で示せよー。」

改札を抜けると、高崎と弓削さんは手を振りながら逆方向へと消えていった。

相手はいいたい、どんな子なんだろうな。ぼけーっと考えていた電車内で、携帯電話に一通のメールが届いた。高崎からか。「弓削です。一つ、アドバイスしちゃいますよ。たとえメッキでも、優しさはいつもよりたくさん、デスよ。がんばってくださいね。」

うん、がんばるよ。そう返事をしたものの、俺にできるかな。チョコレートのお礼がうまく言えなかったぐらいだから……。

地元の駅を降りると、見慣れた後ろ姿を発見。今、帰りなのか。

「おーい、ヒメー。」

あれ？ 声をかけるも反応なし。気付いてないのかな。

俺は小走りで近づくと、とんとんと肩を叩いてやった。

「ヒメってば。」

「ひえっ？」

突然振り返ったヒメにびっくりし、俺もつい一歩後ずさってしまった。

「ごめんごめん、びつくりした？」

「あ、うん。ちよつと考え事してたから。」

身体ごとくるとこちらを向けたヒメの手には、何やら大きな鞆がぶら下がっていた。

俺がそれを見ていることにヒメも気付いたらしい。

「あ、これ？ 今日、ノエルところに遊びに行つてさ。ちよつとした借り物を、ね。」

ヒメが「ノエル」と呼んでいるのは、友達の名ノエル（くすのきのえる）のことだ。昨年クラスメイトだったから、俺の友達でもある。そういう服が好きなノエルに罪はないが、今はノエルのことを思い出したくない……。夕方の苦い経験が思い出される。

そのノエルから何を借りてきたのかは知らないが、本当にでかい鞆だな。女子としては背が高く、続けてきた剣道のおかげで割としつかりした身体のヒメが持つても、アンバランスなサイズ。

「その鞆、重いだろ？ 持ってやるよ。」

「うん、いいよ。そんなに重たくないし。シノンも荷物持つてるしさ。」

確かに。んでも、こっちは小さくて軽いからなあ。

「そうだ、じゃあ、交換するか？」

「ありがと、でも大丈夫だよ。私の方が重たいもの持てるしね。」

……うあ、それを言いますか。

運動能力が高く身体を動かすことが得意なヒメ。対して、運

動は苦手と言った方がいいインドア派の俺。そりゃ、そうすけどねえ。

「そうなんだけどさ……。ハッキリ言われると、ちよつと落ち込む。」

おどけて落ち込む風を見せると、ヒメは悪びれた風もなく、あつさりと反応した。

「ははっ、気にしちゃダメだよ。シノンはシノンでいいところがあるんだから。可愛い服が似合うとか。」

ま、そうだな。小学校の時なんか、ヒメにランドセルを持ってもらったことがあったぐらいだしな。今でもこいつによく言われるんだよ。あの頃はヒメの宿題と交換だったつけ……。ん？ いやちよつと待て。

「お前、今なんて言った？」

我が心の平穩は、この刹那、崩れ去ることになった。

「詩音から聞いたよ。ノエルが着るような服着せたら、すつごく似合ってたつて。ほら、写メもらっちゃった。」

ぱたつと開かれた携帯のディスプレイには、戸惑う顔がいじらしい俺の姿。これ、どこまで広まってるんだろう……。

すつかり沈んだ俺のハートには、もう何人の声も届かないよ。帰り道、嬉々としたヒメは好き放題聞いてくる。「バックフアスナーはどうやって止めたの？」とか「下着はどうしたの？」とか……。俺の受けた辱めを一部始終自白させられ、もう泣きそう……。

厳しい尋問が終わり、俺が解放されたのは家の前だった。駅からここまで歩いて30分。よく耐えたぞ、俺。

「じゃ、おやすみ。シノンちゃん。」

うああ、まだ言うか。

「ああ、じゃあな。いじめっ子。」

ささやかな抵抗を試みた俺だが、返り討ちにあつて退却することとなった。

「いじめてなんかないよ。いいと思うけどな、可愛い服が似合うのって。」

……全然よくないって。

今日はいろいろあったな。

便利な言葉であまりに悲しい出来事を隠して、眠りにつこうとしたそのとき。携帯電話に一通のメールが届いた。

「明日、がんばれよ。どんなに失敗しても、今日以上に恥ずかしいことにはならないって。」

心の中ですら、恥辱を隠すことは許されないらしい。

高崎のヤツめ。なんてこと……。

ま、高崎なりに、応援してくれているのかもな。と、もう一通メールが。

「そーいやあの写真、ノエルに送ったら悔しがってたぞ。私より可愛いって。」

前言撤回。こいつだけは許さん。

携帯の電源を切って放り出し、さっさと寝ることにした。

眠い……。

土曜日はたいいてい昼過ぎまで寝ている俺が、午前中、それもまだ朝と言える時間に起きた。眠くて当然だ。しかし遅刻するわけにもいかなないので、眠気を振り払って身支度を調べ、まだ早めだったが家を出た。

外はいい天気で、もう春かと思うほどに暖かい。いかにもデート日和ですって感じが、ちよつと気恥ずかしいな。

空を眺め、町並みを眺め、さあ次は何を眺めよう。そうやってあえて考えないようにしていたが、気付くと興味はそちらに向いていた。いったい、どんな子なんだろう。もうあと何分かでわかることは言え、いや、あと何分かかわかるからこそ、いろいろと考えてしまう。

ヒメは下級生からもらったと言っていた。うちの高校は学年でリボンの色が違う。それを見てヒメは言っているのだから、下級生であることに間違いはないんだろう。でも、俺に下級生との接点はない。

部活や委員会の類はやっていないので、先輩後輩関係は全くないんだよ。学校の外でも誰かと会うようなことはしていない。するとそもそも、なぜ俺のことを好きな下級生がいるのかとい

う今更ながら、とても根本的な疑問に辿り着く。

……わからん。

さっぱりわからない。まあ、世の中には一目惚れとかそんなものもあるらしいが、俺が一目惚れを誘発するようなルックスを持ち合わせていないことは確かだ。なんだろうなあ。

目の前の赤信号に立ち止まり、右から左へ、左から右へと走りゆく車を眺め、もう一度考える。下級生と出会っていそうなところは。

ない。そう結論づけると、信号に青色が点つた。ま、会ってみれば誰かがわかるし、聞いてみれば理由もわかるさ。

程なくして駅前、指定された桜の木が視界に入ってきた。

待ち合わせ時刻の十分前。もう少し早めにつくかと思っていたが、歩みがだいぶ遅かったらしい。それでも余裕だな。

さてと、木の下に……。先客は確かにいた。この距離からだと顔はわからないが、スカートをはいている。女の子だ。と言うことは、彼女か。

えっと、会ったらず、なんて言えはいんだ？ そうだよ、それ考えてなかった。「初めまして」か。でも、向こうにしてみりゃ知ってるから告白してくれてるんだよな。初めましてはおかしいか。朝と言え「おはよう」か。んでもなあ、初対面の相手にいきなりおはようってどうなんだ？ ちよつと馴れ馴れしいというか、おかしいよな？ じゃあ「おはようございます」とか？ これも違う。あーどうしよう。

つて、うあ、もうすぐ目の前だよ。あー、俺、本番に弱かったんだっけ。なんか手が震えてきた。心臓もバクバク言ってるよ。ああああああ、どーするんだよつ。

幸いにして彼女は、俺の方を向いてはいなかった。おそらくは九十度右を走っている、大通りから来ると思っているのだろう。いやあ、助かった。手でも振られたら、俺は振り返すべきかどうかで悩んだ末に何もできない、ダメなヤツになること間違いなしだよ。

でも、これは気付いてもらうために声をかけないとならないってことか？ え、でもさ、でもだよ、なんて声をかけるんだ？ 人違いだったらどうするんだよ？ すげー恥ずかしいよ。あーもうつ、高崎にでも聞いておくんだつた。

「おはようございます、東雲先輩。」

だあつ、ちよ、うるさいよつ。今考え事してるんだからつ。

……はい？ あ、は、はいつ。

「お、おはようございます、え、えっと、あの……。」

「ふふつ、先輩ってばカワイイ。緊張しなくていいんですよ？ ほら、私ですよ。」

目の前の女の子はそう言うのと、後頭部の左よりに止めてあった、真っ白なりボンを引き抜く。アップになっていた髪がほどかれ、ふああつと宙を舞い、程なくして綺麗におろされた。

あ……。

「思い出しました？」

目を丸くするとは多分、今の俺のようなことを言うんだらう

な。昨日見た、弓削さんの姿がそこにはあった。

「これ、一度やってみたかったんですよねえ。普通はリボンを結ぶ前にゴムで止めちゃうんでできないんですけど、今日は友達に手伝ってもらってがんばっちゃいました。」

いや、でも、なんで……。

「んー。先輩、嬉しくないんですか？ まあ、私ってそんなに『可愛い』って感じじゃないと思いますが、今日はお洋服なんかも気合い入ってますし『妹』的な感じがなかなかじゃありません？」

「え、ま、まあ、そうだね……。」

俺は何を言ったものかと考えることすらできない。何を考えたらいいのかもよくわからない。

そ、そうだ、ちよつと整理しよう。一昨日チヨコレートを買った下級生は、今日の前にいる子。目の前にいるのは、昨日買った物をつきあつてもらった弓削さんだ。弓削さんが、俺のことを好きらしい。

「……ホントか？」

つい声に出してしまった心のモノローグに、弓削さんはにこにこ反応している。

「あのー、先輩？ 大丈夫ですか？」

俺の顔を下から覗き込む彼女の、真っ白なコートが眩しい。どうやって返したらいいのがわからず、じつと彼女を見るのも恥ずかしくて、明後日の方に視線をずらしながら黙ってしまった。うあ、かっこわるいな、俺。

「これは災い転じて福となす、かも知れませんが。ま、それはさておき。じゃあ先輩、行きましょっか。」

にこつと笑いなおした弓削さんは、覗き込んだ顔をさらに近づけて、つて、うあつ。俺はつい身を反らしてしまった。が、彼女に左腕をぎゅつと捕まえられ、引つ張られてしまう。

う、うあ、そんなびつたりとくつつかなくても。大した速さで歩いているわけでもないのに、彼女に凄く引つ張られている感じがしてしまう。

「はあ……。そんなに私から逃げようとしなくてください。せっかく腕を組んでいるんですから、一緒に歩く気持ちにならなきゃダメですよ。」

そ、そんなこと言われたつて……。あう。

「それと、思ったことがあつたら言っていいいんですからね？ 緊張したり、舞い上がったりするのは悪くありませんが、度が過ぎると興奮めです。手が震えているのに無理して、つてのがいいんですから。ただ単に緊張してるだけではダメです。」

でも、そんなこ——

「はいはい、『そんなこと言つたつて』とか思っているなら、そう言えばいいじゃないですかね？ 多少は会話にもなるし、積み重ねればデートっぽくなりますつて。わかりましたか？」

「は、はい。わかりました……。」

「はい、よくできました。つと。私の授業はこれでおしまい。あとは本当に好きな人と、一緒にお勉強してくださいね。それっ。」

へえっ？

彼女は腕をほどくと、くろりと視界から消えて俺の背中を押す。つんのめりそうにながらばたばたと足を前に進めた俺は、ぼんっ、と何かにぶつかった。

「お、おはよ、シノン……。」

「ああ、ありがと。」

聞き慣れた声に、俺は多少の落ち着きを取り戻したらしい。今までは自分の身体がどうなってるのかの感覚もないぐらい。自分の顔なのに、笑っているのか泣いているのかもわからないような状態だったからな。うん、今はちゃんと笑顔で、ちゃんとお礼が言える。よしよし。つてうあ、まだ終わったわけじゃないんだよ。

ヒメの顔を確かめて「さんきゅ」と言うと、振り返り、つて、はい？

もう一度ヒメの方を見ると、その姿に釘付けになった。

「どうしたんだ？ お前。」

明るい笑顔が売りのヒメが、微妙な顔をして黙っている。そりゃまあ、こんな格好自体が微妙というか、いつも通りじゃないわけだが。それでも程なくして、いつも通りの声で答えた。

「あのね、シノン。チョコレートと手紙、私のなんだ……。」

「えっ？」

反射的に後ろを振り向くと、弓削さんから返ってきた言葉は。「こっち向いても何もありませんよ？」

多分、俺は気付いているんだと思う。それがどういふことなのかを。

再び向き直ると、ヒメは俺の目を見据えて言った。

「東雲忍さん、私、春日朱姫はあなたのことが好きです。つきあってください。」

雑踏の中でもその声はハッキリ聞こえた。世界にはその音だけしかないかのように、ハッキリと。

「え、えと、その……。」

突然そう言われたつて、ましてやヒメにそんなことを言われたつて答えられるわけがない。でも、嫌いなわけじゃないし、かといつてそういう好きでもないし……

『思ったこと言えば、いいんですよ。』

そうか。背後から聞こえたような気がした、弓削さんの言葉に従おう。相手はヒメなんだ、今更、隠すことなんて何もないよな。

「あ、あのさ、俺はヒメのこと好きだけど、その、そーゆー好きじゃないし……。今すぐ、はいとか、いいえとか、言えないかなつて……。」

「うん、ありがとう。」

ヒメは、笑った。けど、その笑顔は今まで見たことのない、楽しそうなわけでもなく、嬉しそうなわけでもない、俺がどう反応したらいいかわからない、笑顔だった。だから、そう伝えよう。

「あ、あのさ。俺、なんて言えばいいのかな？」

「えーっ。それを私に聞くのお？ わ、私だって恥ずかしくて、そんなの言えないよ……。」

「でも、まさかヒメだとは思わなかったから、その……。」

「あの手紙の字で気付いてよねっ。シノンのバあ力。」

「そ、そんなこと言ったって、お前、普段あんな綺麗な字書かないだろ。」

「うっ……。そ、そりやそうだけど、それを気付くのが当然なお。」

「あのなあ、っあっ。」

あ、あわあつ。

突然背中を押されたようにバランスを崩して、俺は、鼻先の距離に来てしまった。

つい目が合ってしまった、気まずい。

「あのね、シノン。お願いがあるんだ。」

「な、何だよ？」

あまりにも近くで輝く瞳に魅入られて。視線を外すこともできず、足は固まり後ろに下がることもできず、もう、どうにもなれと思いながら。俺はヒメの言葉の続きを待っている。

「嫌じゃなかったら、私のこと『朱姫』って呼んで。つきあってくれなくても、彼女にしてくれなくてもいいから。ね。」

「い、いや、お前、今更……。」

こんな状況で名前なんて、恥ずかしくて呼べねえよ。

「お願い。ね、し、しのぶ、……。」

鼓動の音がよく聞こえた。両手が震えているのがよくわかっ

た。棒になったような足ですら、震えているんだと気付いた。この感覚に一番近い表現って、何だろう。恥ずかしいわけでもなくて、緊張しているわけでもなくて。

「ずるいよ、私だってがんばったのに……。」

直視もできない、外すこともできないヒメの瞳に、俺は従うしかなかった。

「……あき。こ、これでいいのか？」

「うんっ。」

いつの間にかヒメはいつも通りに、元氣いっぱいに身を翻した。俺の右腕を取り、思いっきり引くと。

「じゃ、行こっ。忍っ。」

「あああつ、こら、引っ張るな。ヒメっ。」

「ぶーっ。違うよお。私は朱姫だよ。」

まるでお預けを食らった犬のように、俺は朱姫の前に立たされ、そして言わされた。

「朱姫。」

でもそんなの恥ずかしくて、やつぱり冗談でも混ぜなくちゃ、言えないよ。

「その服、似合わない。お前可愛くないからなあ。」

「あー、それ余計ーっ。」

けたけたと明るく笑いながら、ヒメは再び、俺を引っ張り出す。

明るい黄色のお姫様みたいな洋服は、ヒメによく似合ってい

た。「朱姫、似合つてるよ。」と小さく口にしてみただけど、
ま
だこの言葉は伝えられそうにない。

第二章 「嘘つきな私、本当の気持ち」

「ハッピーエンド。よかったよかった。」

「そうね。ヒメの奥手ぶりには感心させられたわ。」

「それはひどいですよ、千絵里ちゃん。誰だって『嫌われたら』
って思っ、なかなか言えないものなんです。」

「ノエル先輩の言うとおりですけど、部長はちよつと……。こんな手の込んだことをする方がよっぽど度胸がいると思ったんですけど。」

一同、弓削さんの意見に同意。皆ボテトやらドリンクやらを口にしながら頷いている。その手の込んだことのおかげで、私たちは日曜の朝から女四人、ファーストフード店なんかにいるのだから。

発端はヒメがシノン君に渡したバレンタインチョココレート。

一緒に入れたメッセージカードに、ヒメの名前を書き損ねたことで始まった。その衝撃の事実にはヒメが気付いたのは剣道部活動中。直後、部内では緊急ミーティングが行われたそうだ。そもそもそれがおかしいんじゃないの？ と思っただけで、まあ、女の子らしい一幕かなとも思っただ。

名前を書き忘れたら書き忘れたで、「実は私なんだ」とか言えば解決なんじゃない？ そんな剣道部内の主流派を退けたヒメの案が、今回の一連の騒動だった。妙なところに勢いがあつ

て、ここぞと言うところにおろおろしてしまう、ヒメらしい出来事だったと言え、そうかも知れない。普通、こんな珍妙な案は押し通せないよ。

かくして男女五人からなる「ヒメの告白軌道修正チーム」が結成され、今に至っているわけね。

「でも、ノエルはヒメちゃんにお洋服着せられて嬉しかったな。私より似合ってたのはちよつと悔しいけど……。」

今、私の向かいでハンバーガーを頬張っているのが楠ノエルさん。いかにも女の子っぽい、フリルのついたお姫様みたいな服を好んで着る子。今日のヒメの洋服は、ノエルさんがレンタルしたものだそうだ。私には理解できない趣味だけど、着られる子がちよつと羨ましい。やっぱ可愛いもの。

「悔しいと言えば、昨日の東雲先輩ですよ。アレは反則……。」

あの汚れのなさは女の子じゃ無理ですね。あの格好で告白したら、たいていの男は一発で落ちますよ。」

ノエルさんの隣にいるのは弓削詩音さん。弓削さんは剣道部の一年生で、今回の騒動では一番の被害者かな。とは言え、告白した下級生役には乗り気だったみたいだけど。今日の服装は、明るいオフホワイトのケープつきコート、衿とカフスにはファスナー。そんな可愛いコートを脱いだら、これも可愛い淡いピンク色のワンピース。

「今日の私の服だって、年上相手なら一撃必殺の勝負服なんですけどね。全然勝てませんよ、こんなじゃない。」

その言葉はむしろ謙遜だと思われるぐらいに、弓削さんは可愛い。ちなみに「役立つとは思っていませんでしたけど」と断った上で、「下着は白にしちゃいました。普通はあり得ないんですけどねえ、東雲先輩は間違いなく、そーゆー特殊な趣味の人ですよ」とも言っていた。多分その可愛さから、男の人とつきあうのにも慣れてるんだろーなあとと思う。

「そんなに可愛かったのか？ あ、写真あるんだ。ありがと。……これは常軌を逸しているな。確かに顔はシノンだが、信じられない。」

私の右で、男の子のような話し方をするのは津村千絵里（つむら ちえり）。すらつと背の高い、とびつきの美人。女の私でさえ、憧れずにはいられない容姿を持っている。でも中身は、話し方から想像ができるとおり。何でもハッキリ言ってくれて、私みたいなぼんやりにはとつてもありがたい友達なんだけど。

「私にも見せて。……ホントだ、シノン君凄い。ヒメちゃんも男の子の服に合いそうだし、入れ替えてみたらおもしろそう。」

と、思ったことを素直に言ってしまったのは私、倉田裕子（くらた ひろこ）。これだけ「女の子」に囲まれてしまうと、埋もれてしまう地味な外見。眼鏡が地味さに拍車をかけているとわかってはいるけど、目が悪いんだから仕方ない。コンタクトを試したこともあるけど、炎症起こしちゃってからはもう、二度とするものかと思った。

そして他に野暮用がと言って今日の参加を見合わせた、唯一

の男の子である高崎君を加えた五名が、今回の被害者。

その高崎君が今日抜けたことは、正解だったんだなあ、って思うの。

「あの二人なら、やりそうだな。しかしそういう場面を想像させられたり、さっきの『朱姫って呼んで』なんてのを聞かされると、私たちの行動が非常にばからしいものに思えて仕方ない。」

そう、千絵里の言うとおり。何よ、幸せを見せつけたかっただけなの？ と思っちゃう。でもまあ、みんな心の底では、そんなに嫌だなんて思っていないの。こうやって騒げることは楽しいし、やつぱり、人の幸せを見ていると、自分も幸せになれる気がするから。

「ノエルもそう思う。でもあれで失敗されちゃったらがつくりしちゃうし、やつぱりハッピーエンドでよかったのよね。」

ハンバーガーを食べ終わると一言発したノエルさんは、再び食べ物に興味を移す。今度は次々とポテトを放り込んでいる。

「お人好しだな、私たちは。」

「そうですね。本当はキスぐらいしちやいたかつたんですけど、部長に殺されたら嫌ですからねえ。『私とどっちが好き』とか無茶苦茶なことも言ってみたかったです。ああ残念。」

「やればよかったのに。シノンが間違つて弓削さんを選ぶところ、見たかったなあ。」

「間違つて、つて何ですか。ま、まあ、誤りですけどね。私がどんなに東雲先輩好みの外見だったとしても、部長を選ぶはなく

ちゃダメなんですから。」

千絵里、さりとてなんてことを。そんなことを考えてたんだ。でも、弓削さんの言うとおりそれは「間違い」であって、あっちゃいけないことだよ。

さつきまで眠いだの面倒だの、疲れただの帰りたいだの言っていた四名様ご一行だったけど、こうしてしばらくの間、たわいもないおしゃべりを続けてしまった。三人寄れば何とやらとはよく言ったものね。まあ、私もその一人だけ……。

「あさ。」

ノエルさんの声に、ふと場が静まった。さつきまではせっせと食物が運ばれていた口を結んで、俯きがちなそのトーンに、あれっ？　と思ひみんな黙ったのだろう。

「ノエルも告白、しようかな。」

普段は「女の子です」と言わんばかりのトーンで可愛いしゃべり方をする彼女だけど、こんな話し方もできるんだ。私は言葉の内容より、その雰囲気になじつと驚いた。周りもそうだったらしく、一瞬の間ができる。そして揺らぎのない、まっすぐな声を通った。

「好きなら好きって言わなくちゃ、伝わらないだろう。でも、相手も好きでいてくれるとは、限らない。それが幸か不幸かは知らないが、聞きたくない答えが返ってくることもある。」

千絵里らしい言葉だ。ヒメとシン君を見て「いいな、私も告白したら、ああなれるのかな」と思ったのはノエルさんだけ

じゃないんだと思う。相手がいないのに私も思った。だから千絵里は、こんなことを言ったんだろう。二人はたまたまうまくいっただけで、誰にでも平等に、望む結果も、望まざる結果も訪れうる。

でもノエルさんには、そう聞こえなかったのね。

「そうだよ、ノエルなんか、好きになってもええなよね。」

「ノエルだからじゃない。誰にだって、好きな人に好きでいてもらえない可能性はある。たとえば、そうだな、高崎がノエルに好きだと告白しても、ノエルの答えは『私も』じゃないだろう？　それだけのことだ。」

こんなときの千絵里の言葉は、恐ろしく正確だけど、その通り、本当に恐ろしいと思う。いつだったか彼女は言っていた。

「後悔しないように、誤解されないように、いつでもまっすぐな言葉で伝えたいんだ」と。そんな彼女らしい発言だとは思わけれど、ノエルさんにはちよつと酷じゃないかな。

「千絵里、それはちよつと……。」

「私も、津村先輩の言うとおりだと思う。けど、ノエル先輩なら大丈夫です。ノエル先輩って人気あるんですよ？」

千絵里の言うとおりなのか……。まあ、事実はそうなのかも知れないけどね。何と言うか、あまりに厳しい……。二人に言い切れちゃうと、私がある場凌ぎの慰めを言ったみたいでちよつと情けない。実際、そうだったのかも知れないけど……。

「でも、ノエルの好きな人、女の人なんだよ……。」

ストローが入っていた袋をもてあそびながら、ノエルさんは

心配そうにつぶやいた。こればかりは、仕方のないことなんだろうと思う。あくまで、想像の域を出ないんだけど。端から見たら相思相愛で間違いないかったヒメでさえ、告白するときにはびくびくしていたんだもの。

そのヒメの時と同様、ここで活を入れるのは弓削さん。

「いいじゃないですか。男はやっぱりダメ。もういい加減飽きました。みんな二言目にはエッチさせろって感じてもらう、最悪ですよ。」

さすが……。弓削さんは一つ年下だけど、何人もの男の人とつきあったことがあるらしい。ヒメは「五、六人は経験しているはず」って言ってた。そういう人の言葉には、やっぱり重みがあるよねえ。私なんかからきしだから、ひたすら感心してしまう。

「女同士だったらそうならないという保証もないと思うが。それはさておき、好きな男でも女でも関係ないだろ。」

そうだよね、千絵里もなんだかんだ言って、やることはやってるのかなあ。

「って、え？ 女同士？」

響いたのは自らの素っ頓狂な声。しまったと後悔するまでに、多くの時間は要しなかった。千絵里と弓削さんの冷たい視線と、ノエルさんの俯き加減が、私を責める。で、でも、そんな、女の子同士なんて……。だって女の子同士なんだよ？ そんなのおかしいよ？

「女同士、男同士は理解されないこともあるけど、好きな相手

もそうだと決まったわけじゃない。それは男女の組み合わせだって同じ。落ち込むことはない。」

千絵里は至って平常に言つてのけると、汗をかいたドリンクを手に取りストローを咥えている。

私の考えの是非はわからないけど、なんてひどいことを言っただろうと深く後悔した。かといつてここで謝るのも何か違う気がして、何も言えなくて。何も言えないことで、もっと後悔してしまう

「そうですね、人それぞれですよ。決めました。告白します。」

ノエルさんの決意に、私はだいたい救われた気がした。ごめんなさい……。

ヒメとシノン君がめでたく恋人同士になった日から、数日後いつにもまして可愛い声で、ノエルさんが吉報を携えて現れた。

「裕子ちゃん、千絵里ちゃん。聞いて聞いて。」

「はいはい、言わなくてもわかってるからもう帰っていいよ。」

千絵里のあしらいにめげることもなく、彼女は便りを続けた。

「おっけーもらっちゃった。てへっ、これで私も幸せさんなのでえす。」

「おめでとう。それと、あのときはごめんね。」

私は今も、先週の失言を後悔していた。運良く彼女の告白は叶い、私の罪は消えようとしていたけれど。やっぱり、言ってしまったことに對する自責の念は消えようもないの。彼女も多分、そのことに気付いてくれている。

「うん、裕子ちゃんのおかげでうまくいったんだよ。璃紗先輩にも言われたもん。『どうして女の私なの？』って。裕子ちゃんに言われてなかったら、ハッキリ答えられなかったと思う。」

屈託のない笑顔で、私を私から守ってくれた。なんだか、凄いなと思った。人を好きになると、こうなれるのになって、単純な思いつきが頭をよぎった。

「凄いね、ノエルさん。」

「そうだな。告白なんて簡単にできるものじゃ、ないんだろうな。」

ノエルさんがスキップしながら出て行った教室には、もうすでに、千絵里と私しか残っていない。部活へ行くもの、帰宅するもの、様々ではあったが、教室に残るものはいない。いつもの光景ね。

千絵里は違うクラスだけど、こうして同じ教室で、放課後話していることは珍しくない。千絵里は放課後音楽室へ行く途中、よく私のクラスに寄ってくれる。

「千絵里はさ、好きな人とか、いるの？」

「いないな。裕子はいるのか？」

「いない。と言うか、人を好きになっただけがないもん。」

だから私には、恋愛とかよくわからないの。それでも男女ならありふれた光景で、想像ができたけど……。女の子同士なんて、全然わかりつこない。男の子も好きになっただけがないけど、女の子を好きになることはなんだかあり得ないことにしか思えなかったから。

「なるほど。私も似たようなものだ。」

「似たようなものって、好きになったことはあるんだ？」

「難しい質問だな。好きだったかどうかわからないが、氣になっていた人がいたことはある。」

「ずるい、千絵里。どんな人だったの？」

「そうだな、外見はとても可愛らしい感じの人。私より背も低くて、身体も細い。高校に入ってすぐで、見慣れない制服姿にやられたのかも知れないな。でも、その人にはつきあっている女の子がいたんだよ。氣付いたときには多少落ち込んだ記憶もあるが。それ以降は氣にもしていない。」

何とも千絵里らしい話……。自分のことにすら関心が薄いと言うか、何と言うか。

「きつと、好きだったんだよ。」

「そうなんだろうな。当時は氣付かなかったけど、今にして思えば、そうだったんだろう。」

「それつきり、好きになった人っていないの？」

「ああ、いないよ。今じゃ恋愛をしたいとも思わないし、多分、しばらく好きな人なんてできつこないんじゃないかな。」

「え？　なんで？　私は憧れるけどなあ。ヒメとシノン君みたいに、なりたいじゃない。」

「そうか？　あんな面倒そうなことやりたいと思わないし、やる時間もない。ピアノを弾く時間、これ以上減らせないから。」

本人曰く趣味で、千絵里はピアノを弾いている。その腕はかなりのものらしい。あんな感じの性格なので、本人はピアノストになかなれつこないと言うが、周りは未だに諦めていないぐらいだ。

毎日放課後、音楽室に通うのもピアノを弾くため。部活動が盛んな方ではなく、また、吹奏楽部やら合唱部やらのない我が高校では、放課後の音楽室は空室。あそこにあるピアノが気に入っている千絵里は、毎日好きだけ弾けるという寸法ね。

「凄いなあ、千絵里は。私なんか好きになったこともなくくせに、恋愛したいとか、彼氏欲しいとか思っちゃうよ。」

「凄くはない。私だって一応、女子高生。男やセックスに興味がないわけじゃない。でも、そんなことに使える時間がないだけだ。一日があと五時間長かったら、……やっぱりピアノ弾いてるかも知れないけどさ。あーあ、こりゃダメだね。」

おどけた様子で肩をすくめ首を振る千絵里に、私はつい笑ってしまった。

「千絵里らしい。ピアノ、好きだもんね。」

「大好きだよ。恋人はピアノ、今気付いたわ。」

小さく笑いながら、じゃあねと手を振って千絵里は教室を出て行った。今日も音楽室へ行くのだろう。

恋人がピアノ、か。千絵里ってば、本気で思ってたりにして。千絵里の恋人がピアノかあ。なら、私の恋人って、これ？

片手に持っているのは数学の教科書。最近さっぱりわからないんだけど諦めきれないあたり、恋愛っぽいのかな？　でもこれが恋人って、なんか最悪……。

放課後、千絵里がピアノなら、私は数学の勉強をしていることが多い。どうせ帰ってもテレビ見たり本読んだりして過ごすだけなので、勉強は教室で済ませてから帰ろうという算段。これでも一応理系のクラスにいるので、数学ができないのは致命的。二期期の間あたりからはさっぱりついて行けなくって、こーやって放課後勉強しているの。だからと言ってできるようになったわけでもないんだけど。

放課後の教室はとても静かで、勉強には最適だ。なんと言っても、誘惑がない。家に帰ればテレビや本、お菓子の誘惑に駆られるが、ここには何も無いから。まあ、多少のお菓子ぐらいはあるけど。

でも常に、ずっと静かでないのもこれまたいいところなのよね。たまにこんな風に、お客さんが現れたりする。

「えーっと、あ、ごめんね。勉強の邪魔しちゃった？」

ここは普通の教室だから、誰か来るにしても同じクラスの人がほとんどなんだけど……。今日は珍しく、違うクラスの人、それも見たこともない人だ。

「いいえ、大丈夫です。」

「そっか。じゃあ、悪いんだけどさ、ちよつといいかな。」

そういうと突然のお客さんは、てくてくとこちらに向かつてきた。何するんだろう？

私の目の前に立ち止まった彼は、ひょいと私の胸元に手を入れてきた。

「ひゃつ。」

驚いて退く私を気にすることもなく、引き出しに手を入れがさごそと何かを探している風だ。

「えーつと。確かこつちに……。」

……つて、黙つてる場合じゃないんだ。ここ、私の席だもの。

「あの、ここ、私の席なんですけど。」

「えっ？」

思い切つてハッキリ言つてやつた私の声に驚いたのか、今度は彼が仰け反つた。片手を引き出しに入れたまま。……あ、倒れる。

——ガッシャーン。

ほうら、言わんこつちやない。机は派手に、彼の上に倒れた。

教科書やノート、筆記用具は見事なまでに散乱している。あらあら、大変。つて、私の机よ、これ。

「あああ、いたたた。つと、ごめんごめん。今直すから。」
当然でしょうが、もう、いつたい何なのよ。

机を倒され苛立つているのが伝わったのか、目の前の珍客は弁解を始めた。

「あー、ここ、二年五組だったんだね。ごめん、隣と勘違いしちゃつてさ。」

言い訳をしながら、私の目の前に机を立て直している。

隣つて、あんた、見知らぬ人が座つてるんだから気付きなさいよ。

「ホントごめん。えつと、じゃあ、お詫びにこの問題を解いて進ぜましょう。」

悪びれる様子もなく、私の教科書ノートをひっくり返すと真正面ですらすらと解いている。覗き込んだノートには、まるで模範解答のよう。とても綺麗な字で、丁寧な途中式が記されている。

「ここ、ポイント。じゃあ、がんばつて。それと、ごめんね、邪魔しちゃうつて。」

明るく高い声が、二人だけの教室に響いた。……あの感じが、全く反省していないわね。

いつの間に私の方に向けられたノートには、やはり綺麗すぎる解答が残っていた。重要らしい部分にはご丁寧にも赤丸がつけられている。

小憎たらしいガキね。そう思いながら、ありがたく模範解答には目を通していた。悔しいけど、わからなかった問題なんだから。

予期せぬ出来事を挟みながらも、放課後は概ねいつも通り。私は勉強をしていて、時間になると千絵里の声が聞こえる。

「裕子おー、帰ろおー。」

静かな廊下で反響して、わずかなりバープを伴って教室に入ってきた。いくら誰もいないからって、姿も見えないうちに廊下で、しかも大声で言わなくてもいいのに。でも、これがちょっと放課後っぽくて好き。だから私もつい、返事をしてしまう。

「わかったあー、片付けるねえー。」

今日もやっぱり、授業の内容に追いつけるか追いつけないかと言ったところね。それでもやらないよりはマシ。多少の満足感とともに教科書とノートを閉じて、机の中に放り込んだ。本来なら鞆に放り込むところだろうが、家ではどうせ勉強をしないので持つて帰らないことにしている。使いもしないものを入れて、鞆を重たくすることはないものね。

何が入っているというわけでもなく、何を入れるというわけでもないが、鞆の中身を確認。なぜだかわからないけど、こうしないと帰っちゃいけないような気がしている。いわゆる儀式みたいなもの。今時珍しいかも知れない、いかにも「通学鞆」な黒の革鞆。ものを入れていないおかげでまだ綺麗なそれを右手に引つ提げ、席を離れたところで千絵里は教室に入ってきた。

「ほい、お土産。」

何の前触れもなく千絵里が突然放ったのは、缶コーヒー？

ふんわりと弧を描いてやってくるそれを、私は左手であつさりとかヤッチ。持ち直して物を検めると、やっぱり缶コーヒー。当然ホットだったらしく、今でも心地よい暖かさを残している。

「どうしたの？ これ。」

「健気に勉強している友人のために、たまにはと思つて買ってきてやった。」

「ふうん。でも私、甘いヤツが好きなんだけど。」

缶に記された「無糖」の文字を見ながら答えた。もらったものにケチをつけるなんて、何とも友達甲斐のある私ね。甘いものが好き、コーヒーより紅茶、それもミルクティーが好き。千絵里はそんなことわかつてるでしょ。

「ご不満は藪田先生にどうぞ。」

「何？ これ、藪田にもらったの？ やっぱりそうなんだ。」

千絵里が買ったものでないことぐらいはすぐわかったが、なるほど、そういうことね。仕方ないから飲んであげよう。鞆を机に置き直して、プルタブを引き上げた。パコンと口が開く音が、千絵里の声と一緒に耳に届いた。

「やっぱりって言うな。何の断りもなく人の目の前まで来て、弾き終わったら『よかったよ』って、もう、寒気がしたよ。」

「それはちよつとねえ。でも、仕方ないんじゃない？ あいつ、千絵里のこと好きなんですよ。」

「認めたくない。教師が生徒を好きになるなどは言わないが、あいつが私を好きになるのは大問題だ。」

そう言う千絵里はくりりと背を向けて、教室を出て行った。

「あー待つて待つて。」

蓋の開いた缶コーヒーを持ったまま、再び鞆を引つ掴んで私も教室をあとにした。もちろん、にやにやと千絵里を冷やかすためね。

「ねえねえ、それでなんて言われたのよ？」

「言われる前に言い返しておいた。私はこれで失礼します、つて。」

「千絵里、冷たいい。」

「ああ。だけど、向こうの方が一枚上手だったね。さっさと立ち去る私に、コーヒーを投げてよこした。あの変態、私に『千絵里ちゃん』って声かけたんだよ。そりゃ振り向くだろ？そこで物が降ってくれば、そりゃ取るだろ？取っちゃったものは仕方ないから、ありがとうございますつて言つてとつと逃げてきたけど。あー、もう、やだよだ。」

寒気がするとばかりに身体を震わす千絵里がちよつとおかしい。繊細で綺麗な外見とは裏腹の男の子っぽいしゃべり方。性格もそんな感じでサバサバしていて、周りを気にせずある意味マイペース。そんな彼女も、こんな仕草をするのかと妙に感心してしまつた。

でも私に言わせれば、私だけじゃなくてクラスのみんなに言わせても、千絵里はちよつと贅沢だよ。あれで藪田も、なかなか人気があるんだからねえ。とは言え。

「そういうところに懂れている子も結構いるみたいだけど。でも『よかつたよ』はちよつと変態っぽいね……。」

「変態っぽいんじゃないかって、変態。今までは我慢してたけど、明日からは鍵をかけよう。」

うんうんと一人頷く横顔を、私は少しだけ、羨ましくも思つた。千絵里は綺麗だから、男の子に人気があるの。学園のアイドルつて千絵里みたいな人のことを言うんだなあつてぐらいに。私だつて一度は、そんな思いをしてみたいと思わなくはない。

もちろん「裕子ちゃん、よかつたよ」はお断りだけ。

頷き終えたらしい彼女を相変わらずぼーつと見ている私に、彼女は辟易した様子で口を開く。

「裕子、よくそんなもの飲めるな。なんか変なもんでも入つてたらどうするんだよ？」

「え？ だつて、千絵里がくれたんじゃない。」

そんな、まさか、そこまで考えて私にくれたとは思わないでしょ。なら捨ててよね。そう言いかけたが、よくよく考えるとあり得ないのよ。

「それに、最愛の千絵里ちゃんへのプレゼントなんですよ？ そんな、毒やら何やらは入れないんじゃない？」

「まあ、言われてみれば……。でも何だ、媚薬とか入ってるかも知れないだろ。」

「……この世にそんなもの、ないつて。」

千絵里、媚薬なんて言葉をそもそもどこで覚えたのよ……。

学校から最寄りの駅前に着くのは、十九時ちよつと前。仕事帰りのサラリーマンが一段落するのか、この時間の電車は割と空いている。今日も空席がちらほら見える電車に乗り込み、千絵里とたわいのないおしゃべりを続けていた。

「やつぱり砂糖なしのコーヒーは苦いよね。おやつは甘いものに限るわあ。」

「なら、これあげる。」

千絵里は鞆の中からがさごそと探し出し、ひょいと小箱を出してきた。

「ありがと。このチョコは誰からもらったの？」

「先週、一年生の男の子から。」

あ、ホントにもらったんだ……。素っ気ない声で答える千絵里から受け取った小箱に、つい憐れみの眼差しを向けてしまう。

「その子はきつと、こうして私の手に渡っていることを知らないんだろねえ。」

「知るよしもなし。だいたい、私が甘いものが好きだとも知らないんだから。」

包装紙がかかっていたであろう小箱を開けてみると、整然と並んだチョコが一つ欠けているようだった。

「一応食べたの？」

「そりゃ、食べなきゃ悪いでしょ？ でもそれ、あんまり甘くないんだよ。」

「えー、甘くないのお。そんなものもらってこないでよお。」

「私だつてもらいたくてもらったわけじゃない。」

私の想像に寄ればか弱そうな下級生が、勇気を出して渡したチョコレート。それが今や、こんな扱いを受けていいものだろうか。しかも、もらった本人はこの言いよう。かなり可哀相よ。もちろん彼女だつて、多少は後ろめたく思っているみたい。

「なんでこんなお姉さんを好きになっちゃったんだろねえ。」

「それをくれた子とは話したことすらなかった。私には見覚えすらない。つまり遠目で見て、私の顔なり身体なりが好きになったんだろ。そんなのばっか。」

あつさり言い放った千絵里には、その態度のとおり、他意などないってわかつてはいるけど、こういう発言には今でもちよつと複雑な気持ちになる。千絵里は自分が綺麗だとは思っていないけど、周りが自分を綺麗だと思っていることは的確に把握している。それだけのことなんだけど、ねえ。女の子としての魅力に乏しい私にしてみれば、ちよつと嫌な感じを受けてしまうのも事実。

かつてそのことで、千絵里とは喧嘩したことがある。モテない女の僻みだったなあと吹っ掛けたあとに情けなくなつたけど、当時はまだ千絵里の言葉がわかつていなくて、ね。

『綺麗な外見には感謝してる。得したことだつていっぱいあるから。でも、それで好きだつて言われても全然嬉しくない。うまく言えないけど、とにかく、嬉しくないんだ。』

わずか数分で喧嘩を幕引きにしたのは、その時初めて見た、千絵里の悲しそうな顔だった。こんなに仲良くなつたのは、あの一件からかも知れない。

「その子も裕子を好きになればよかったのにな。そうすればチヨコは捨てられずに済んだ。」

そして今では、笑顔でこんなことを言われると複雑な気持ちも消えちゃうのよね。だから千絵里と、一緒にいられるのかも。

もらったチヨコレートを一つ口に放り込んだけど、口の中に広がったのはほろ苦い力カオの味。

「これだと、私も捨てちゃうかも。」

そして私は、屈託のない笑顔を返してしまわずにはいられないのよ。

「ああ、なるほど。」

今日も今日とて、私は放課後の勉強中。毎日二時間も数学だけに費やしているというのに、わからない問題は増える一方。これはどうしたものかとどこかで思っていたところに、渡りに船だったのは事実なの。

とは言え、ここまで当然のようにいられると……。と言いなから、私も私で教えてもらっちゃったりしているんだけど……。

「さすがに努力しているだけはあるね。『またできない』ってのがないのは素晴らしい。でも、スタートラインが低すぎるなあ。」

「あんだ、最低ね。」

「その最低に教えを請わないとならない程度なんだ、少しは考えた方がいい。」

ちよつとあんだ、何様のつもり？ ちんちくりんのくせに。顔に似合わず可愛くないヤツ。

机をひっくり返されたあの日以来、こいつは毎日のように私の前に現れた。嫌らしいことに、解答に煮詰まった頃に、こいつはふらつと現れるのよ。たまたま通りかかった的な気取らない風が、逆に鼻につくのよね。あれから一週間以上経つてのに、休みなく、毎日来ている。これはもう完全に嫌がらせと思えない。

「黙りなさいよ。勉強の邪魔っ。」

「はいはい、がんばってくださいね。」

返事もいちいち癪に障るヤツなのよ。それでもこいつの言うとおり、こいつに教えてもらえなかったらどうにもならないという状況でもある。最近の私の不出来はかなりのもので、正直そろそろ考え直すべきかと思っていたぐらい。だから、どうあれ彼が神様にも見えてしまうのよ。しかも教えてくれるときだけは親切で、嫌みな感じも全くないのが厄介。おかげで、つつい聞いてちゃう。そして、また後悔する。

今日はもう、絶対に聞かないわよ。こいつとは口もきかない。そうよ、この程度の問題。

……わからない。途中までは何となく想像がつくんだけどなあ。想像通りにやつても、やっぱり途中で止まっちゃう。はあ、私の意志って、なんて弱いんだろう。

「ねえ、ちよつとここ教えなさいよ。」

あまりに悔しいのでこんな言い方をしているが、私だつて礼儀がなつてないなあとは思っている。でも、仕方がない。どうしたつて低頭平身になれない相手もいるのよ。こいつがそう。

「どれどれ。これはね……。」

結局今日も、一人静かに勉強していると言うよりは、専属の家庭教師にでも見てもらつている感じだった。はあ、こんなことで私、大丈夫なのかなあ。

「お疲れ様。ほい、これあげる。」

目の前のヤツが、私に何やら投げてよこした。……ミルクキヤラメル？

「ちよつとは気が利くじゃない。」

そう言いながら、ありがたく口に放り込もうとしたとき。実にこいつらしい一言が耳に投げ込まれた。

「倉田さんつて、数学だけじゃなくて、物理や化学もできないでしょ？」

「あんたねえ……。」

失礼なヤツだとは思つてたが、ここまでとは。そりゃ、私は物理も化学もできませんけど。

「ごめん、言い方が悪かった。」

できませんけどつ、と言い返してやろうとしたときに発せられた言葉は、彼を繋ぎ止めてしまう原因になった、教えてくれるときの優しい口調だった。そして彼は、そのまま続ける。

「五組にいるつてことは、理系選択者でしょ？　なのに数学が

できないのが不思議だつたんだよ。そこで、試しに聞いてみた。」
試しに聞いた割には、的を射ているのが悔しい。おそらくこいつは、わかつていて聞いたんでしょね。隠しても無駄、か。

「ええ、おつしやるとおり。私は物理も化学もできない、理系っぽくない女ですよ。」

「でも倉田さん、頭はいいよね。おそらく文系の成績は凄くよかったはずだよ。こんなにできないのに、同じ間違いを二度しない人なんか見たことない。」

これ、褒めてるの？　それとも何か続きがあるの？　今までのが今までの鼻持ちならないヤツなのでおとなしく聞くのも癪だったが、今は、何となく悪いことを言いそうな感じじゃない。私は次の言葉を待とうと思つた。

「努力は精一杯したし、運良く才にも恵まれた。なのに、うまくいかないのは、どうしてなのかな。やつぱり僕の努力が足りなかったのかな？」

あれ？　予想外の科白が出てきた。「僕の？」　つてどういうこと？　私の話じゃなかったの？

しかしそれを聞くことはできなかった。

「裕子おー。帰るよおー。」

今日もまた、廊下から呼ぶ声。その声を聞いて目の前の彼も気付いたらしい。

「あ、もうこんな時間か。変な話をしちゃつてごめんね。」

そして、すうつと机を離れようとしたとき。
「なあんだ、いけ好かない男子生徒って伊吹のことだったんだ。」
教室の扉の前で、千絵里が笑っていた。

あいつは根谷伊吹（ねや いぶき）という名前で、隣の三年一組にいるらしい。向こうは座席表を見て私の名前を知っていたが、私は向こうの名前を知らなかった。あんなヤツから聞く気にすらならなかったもの。故に先輩であることも千絵里から聞かされて知った。男子生徒はネクタイの色で学年がわかるようになってるが、あいつはネクタイをいっつもしていない。しかも小柄で中性的な顔立ちじゃ、まさか先輩とは思わないよね。「伊吹とは幼馴染みなんだ。一昨年伊吹の家が引っ越すまでは、すぐそばに住んでいたから。」

千絵里が来ると入れ替わるように、あいつは帰っていった。考えてみればいつもはもつと早くに帰っているの、私のためにわざわざ残っていてくれたのかも知れない。千絵里の幼馴染みと聞いたからかも知れないが、案外いいヤツに思えてきた。帰り道、千絵里とあいつについて話していた。幼馴染みと言っただけあっていろいろなことを知っている。中でも驚いたのは、あいつは学内屈指の秀才だということ。言われてみれば、成績上位者の掲示で名前を見たことがあるような、ないような。なるほど綺麗に問題を解くわけよ。

「でも伊吹って、人をからかったりはしないんだけどな。」

「それは絶対に違うわ。あいつにいじめられた私が言うんだから間違いない。」

千絵里の、ましてや幼馴染みに対する人物評がそうそう狂っているようにも思えなかったけど、私の目の前にいたあいつは間違いなく私で遊んでいた。と、思うのよ。でもやっぱり、千絵里は納得がいかないみたい。

「んー、そう？ 裕子が可愛いから、いじめたくなっちゃったんじゃない？」

「何それ。子どもじゃあるまいし。」

「そうだな。もう子どもじゃないからな。」

小学校の頃は、千絵里が誰かをいじめて泣かすと、あいつがその子を慰めるなんて具合だったとか。跳ねつ返りだった千絵里は成長するにつれておとなしくなったけど、「伊吹は相変わらず、優しくすぎるぐらい」と言う。何とも、釈然としない話ね。

それにしてもあいつはあのとき、何を言おうとしたのだろう。いつものあいつと、優しく教えてくれるあいつと、どっちが本当の根谷伊吹なんだろう。

制服の胸ポケットに入れたキヤラメルにふと気付いて、改めて口の中に放り込んだ。贈り主には似ず、ひたすらに甘い味でした。

翌日も、その翌日も、私が抱いた疑問に対する解答が渡されることはなかった。

困ったことに、翌日以降あいつが現れない。以降と言ってもたった三日間なんだけど、毎日来ていた人がぱったり来なくなるというのは落ち着かないもの。でも、その理由は簡単だった。

「三年生、卒業式まで休みだよ。」

千絵里に聞いたらあっさり解決。そう、三年生はまもなく行われる卒業式を待つべく、休みに入っている時期。言われてみれば、隣の教室に人気はなかった。

しかしあいつは、この教室で、目の前に現れた。

「勉強は捗ってる？」

放課後に突如現れたあいつは、いつも通りに前の席の椅子をこつちへ向けて、さも当然のように私の前に座った。

「ええ。あんたがいないおかげで好調よ。」

「そっか、それは何より。でも寂しいね。せつかく来たのに、頼ってもらえないのも。」

平然とそんなことを言えるのは、私をどう捉えているからなのだろう。優しすぎるぐらいと千絵里が評したこいつは、ひよつとして、私のことを心配してきたのかしら。いや、まさかねえ。

それでも渡りに船。あのとき以来ずっと気になっていたことを聞くチャンスなんだから。

「あのさ、」

そう切り出したとき、彼は私の言葉を遮った。

「あー、ごめん、待って。邪魔はしないから。これだけ教えて欲しい。倉田さんはどうして、数学にこだわるの？」

今更になって気を遣っているような言い方だけど、気を遣ってまでなんでそんなことを？　そもそも休みの日にわざわざ来てまで、どうしてそんなことを聞きたいのかしら。ちよつと不思議。隠すことでもないし、一応今まで教えてもらった恩義もある。

「数学の先生になりたいのよ。」

私はあっさりと答えた。聞かれたから答えはするけど、おそらく彼にとつて興味を引かれるような解答ではなかったと思う。

「数学、好きなの？」

「嫌い。それに苦手。でも、中学、高校と五年か六年は数学から逃れられないわ。嫌いな人にとつては、これってとても不幸なことなの。そんな不幸、繰り返さないで欲しいから。」

私が先生になったからって、数学が嫌いな人、苦手な人を減らせるかはわからない。でも、たとえ幼稚な思いつきでも。

「やってみようって決めたことは、途中でやめちゃダメだから。」

それだけのこと。なのに目の前の彼は思ったよりも真剣な顔で聞いていて、鼻で笑い飛ばされるかと思った私は肩すかしを食らった感じ。「教えて欲しい」とわざわざ来たのは、冗談でも何でもなかったのかしら。

「なるほど。凄いな、倉田さんは。僕も見習わなくちゃ。」

本当に納得して、心改めましたという面持ちに、私はなんだからおかしくなってしまった。どうしてもこぼれてしまう笑いに、目の前の男の子はちよつと怒っているみたいだった。

「なんで笑うのさ。」

「なんかおかしくって。」

こいつのイメージと全然違う答えが返ってきて、なんかおかしい。笑っちゃう。ただそれだけのこと。今になって思い返せば、彼はもともとそういう人だったのかも知れない。

「おかしいかな。」

「んー、普通はそんな、改まって言わないと思うよ？ ま、いわ。私からも一つ質問があるの。」

「一つと言わず、いくつでも。僕に答えられることなら何でも答えるよ。」

今度こそと少しだけ力んで、再び切り出す。

「この前『僕が足りなかった』って言ってたじゃない？ あれ、何のこと？」

にこにこ答えを待っている私に、彼はちよつとためらった。

「倉田さんには言いたくないんだけど、ダメ？」

可愛い顔でこんなことを言われたら、誰だってこういつてしまふと思うの。

「ダメ。」

彼はちよつと困った風だったけど、意を決したという感じでもなく、仕方ないかという感じでもなく、ごくごく自然に話し出した。

「簡単に言っちゃえば、好きな人に好きになつてもらえなかったのは、僕の努力不足だったかな、ってこと。それだけのことだよ。」

「ふうん、そうなんだ。」

「それだけ？」

私の反応は予想していたよりあつさりとしたものだったのかな。彼はぽかんと聞き返してくる。でも、本当にそれだけ。

「だって、それだけのことなんでしょ？」

「まあ、そうなんだけどさ……。」

こいつにも言い淀むことなんかあるのね。ちよつと愉快になった私は、次に何を言おうかと考えている。何なんだろう、私ってこんな意地悪だったっけ？ そんなことを考えてにやにやしていたら。

「それだけじゃないだろ。伊吹。」

聞こえたのは、千絵里の声。視線を移すと教室の扉に立つ彼女が、こちらに向かって「何か」を投げた。

「ちいちゃん。」

声色だけでわかる。彼は目を見開いた、驚いた表情で「何か」を捕らえた。そして手の中にある「何か」に見入る彼に、千絵里は続けた。

「変わることは、悪いことなんかじゃないよ。」

千絵里の口調は、とても強い。何を言っているのかは全くわからないけど、大切なことを伝えようとしているのは間違いない。

いと思う。千絵里のあんな言い方を聞くのは、以前に喧嘩したとき以来だもの。

そして言葉の宛先である彼は、私の方に振り向いて言った。

「ごめん、またね。」

目の前の席を立ち、ゆつくりと足早に、教室を出て行った。

すれ違いざまに「何か」を返された千絵里は、千絵里らしい含みのない笑みを湛えていた。

「いったい何だったの？」

私はもちろん、千絵里に聞いたけれども。

「伊吹とちいちゃん、秘密だ。」

彼女はそう言つて、何も明かしてはくれなかった。

卒業式を終えた、昼下がり。

私と千絵里は、音楽室で人を待っている。

状況が状況だけに「人を」とぼかしたくもなる。

今朝も登校中に一緒になった千絵里が、突然言い出したの。

「伊吹は裕子が好きなんだよ。そして今日、告白するつてさ。

答えを考えておいて。」

今日のお昼はカレーだよとも言う感覚で、あつさりと言つたのよ。あまりの普通さに、私は一度、聞き逃してしまつたぐ

らい。

そのまま聞き逃しておけばよかったな、そう思つてしまう私の悩みはもちろん。なんて答えよう。

正直、彼のが好きだとは到底思えない。

かといって、今や嫌いというわけでもない気がする。

こういうときにどう答えればいいのかなんて、私にはわかりっこない。だって、告白されたことなんてないんだもの。

「ねえ、千絵里。千絵里はいつも、なんて答えてるの？」

「『私は好きじゃないから。さようなら』つて答えてる。」

「……千絵里、それホントなの？」

「ああ、ホントだよ。相手が本当に好きで告白してくれると思うなら、私も本当のことを言わなくちゃ失礼。」

「ま、まあ、そうなのかも知れないけどさ……。」

私にはそんなこと、言えないよ。

だって自分がそんなことを言われたら、ショックだと思う。

かといつて千絵里の言うとおり、嘘が返つてきても嫌だと思つて。

どうしたらいいの……。もう、さっぱりわからない。

「さてと、せっかくの音楽室。ピアノで告白を演出してみようか。」

窓際に私を一人置き去りにして、彼女はピアノの前に座つた。淀みのない手つきで鍵盤をたたき出す。……何よ？ これ。

「ちよつと、千絵里！ これは違うでしょつ……。」

「んー？ 愛する二人と言えば、これしかない。ヤコブ・ルー

トヴィヒ・フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ作曲『夏の夜の夢』より、結婚行進曲。覚えておいてよかったなあ。」

「よくないわよつ。結婚なんて全然違う話でしょつ。」

——

ピアノの音は急に止み、穏やかな声が響いた。

「なら、そう言えばいい。思っていることを伝えてやれ。」
カタンと鍵盤の蓋を閉じ、千絵里はにこつと笑ってくれた。

「でも……。それじゃあ『好きかわからない』って言うことになるんだよ？　なんかそれって……。」

「いいんだよ、それで。」

そんなの、告白の返事としていけない気がする。何だろう、ずるいと言うか、反則と言うか。とにかく、何か違う気がするの。千絵里はああ言うけど……。

好きではないなら断ればいいのかなんて思うけど、それも違う気がして。断るのが悪いとか、そんなんじゃないと思う。けれども、ちょっとだけ好きだから断りたくないとか、そうでもない気がする。なら、何なの？　男の子からの告白を断るのがもったいない？　断るなんて可愛くない？　あーもうつ、わからないよ。

——ガチャッ。

私が一人悩んでいる最中なのに、ついにこのときが来てしまった。防音用の重たいドアが開き、彼が入ってきた。

同時にピアノ椅子から立ち上がった千絵里は、目の前にやってきて耳元に一言。

「ま、初体験なんてみんなそんなもの。がんばってね。」

なんて無責任な……。彼女は真意を測りかねている私に言葉を加えることもなく、まっすぐにドアの方へと向かった。そしてすれ違いざまに二人は、一言ずつ交わしている。

「ちいちゃん、今のは違うんじゃない？」

「それ、もう言われた。」

まもなく、千絵里は部屋の外に消えた。ピアノの音も消えた音楽室には、ただひたすらに静けさだけが広がった。そこにいるのは、私と、彼だけ。

緊張の一瞬はごくわずか、けれども永遠のように感じられる。なんて嘘。もうあつという間に声は飛んできたもの。

「倉田さんが、好きです。」

あーつ、まだ答え考えてないのにい。どうするの？　え、えつと、そうだ、とりあえずちよつと俯いて時間を稼いで。

「……それだけ。じゃあね。」

思っていることを伝えればいいって、そんな何を思っているかわからないから言いようがないよ。あ、そっか、「何を思っているかわからない」って言えば、ダメに決まってるじゃない。ええつと。

……はい？

今なんて言ったの？

ふと顔を上げたときにはもう、彼は背中を向けている。さつ

きの千絵里のように、ひょうひょうとドアの方に向かつていく。「ちょ、ちょっと、待ちなさいよ。あんた、いったい何なの？告白したら普通、つきあってくださいとか、言うでしょ？」どう答えようとか、そんなこと言われても困るとか考えてはいたけど、その答えが求められることがないとは夢にも思わなかった。

絶対あり得ない、そう思っているのは私だけ？ 彼は何も言わず、何を思う風でもなくドアノブに手をかけている。本当にこのまま出て行くつもりなの？ あったま来たわ。

「だいたい告白したんなら、相手の返事ぐらい聞いて行きなさいよ！ あんたのことなんか好きでも何でもないんだからっ。」ハッキリ言つてやると、彼はふらつと振り向いて笑顔。なんで笑つてるのよ……。

「ありがとう。本当の気持ちを聞きたかったから、ちょっと無理しちゃった。倉田さん、断つたら悪いとか思つてたでしょ？でも、断りたいなら断つて欲しかった。嘘ついてても、幸せにはなれないもん。」

努めて明るい声で、彼は私に言つた。言い終わつてもまだ笑顔で、笑顔のまま音楽室を出て行つた。

崩れ落ちた。へたり込んだ私は、思うことしかできない。なんてことを言つてしまつたんだろう。好きでもないのは事実、でも嫌いでもないし、よくわからない。それが私の気持ち。本当の気持ちを、彼に伝えることはできなかった。

「ごめん、なさい……。」

きつと私だって、断られたらつらいと思う。告白の返事は、やつぱり「僕も好き」つて言つてもらいたいんだろなうって思う。なのに彼は、断られてもいいなんて。ちょっとじゃないよ、凄く無理してるんだよ。私が、本当のことを言えるように。なのに、なのに私は……。

「どうして泣いてるんだ。」

視線を上げると、ハンカチを差し出す千絵里がぼやけて見えた。

うまく答えられずにもう一度俯くと、制服のスカートの上に、涙がこぼれた。一つ、また一つと、降り出した雨のように。

「わからない、わかんないよ……。」

どうやって言つたらいいのか、わからない。今の私の気持ち、私にはわかつてる。でも、それがなんて言えるものなのか、わからない。どうしたらいいかわからないの。

「千絵里、教えてよ……。」

「裕子も、優しいな。涙をこぼすなんて……。あいつ、多分保健室にいるから。行つてきな。」

うん。

私は頷けた。全く迷わずに、頷けたんだ。

「うん。それでいい。ほら。」

差し出された千絵里の手を取ると、勢いよく立ち上がつて走り出した。まるで私のものじゃないみたいに、身体が軽い。

「裕子っ。初体験なんて、みんなそんなもんだ。思い切つてや

れつ。」

まっすぐな裕子の声に後押しをされて、重たい扉を開け放った。

誰もいない廊下は電気も消えていて、昼間だというのに薄暗い。日に暖められた音楽室とは違って、ひんやりとした空気を湛えている。私が足を出すたびにパタ、パタと音が響く。その音だけが響く世界には、私以外の誰かがいるように思えなかった。

けれども、そこは明るかった。光の漏れる引き戸を、迷うことなく開いた。眼前には彼がいた。大きく見開かれた瞳に、一気に声を上げた。

「ごめんなさい。私、私はあなたのことを好きじゃない。でも嫌いじゃないの。わからないの。これが本当の気持ち。」

力が抜ける。ぺたんとその場に、座り込んでしまう。

でもさっきとは違う。私の世界は曇ることなく、明るい光が差し込んでいる。

「倉田さん……。ありがとう。そっか、僕、嫌われてはいないんだね。嬉しいな。」

彼はまた笑顔を見せてくれた。無理しているのかも知れない、けれども、私は本当の気持ち传达了。だからなんて自分勝手かな、それでも。彼の笑顔は、心からの笑顔に見えるの。

一步、二歩とゆっくり近づいてくる彼は、これからどんな言葉を発するのだろう。今度こそ「つきあつて欲しい」とか言わ

れるのかしら。大丈夫、今度は言える。「どうしたらいいかわからない」って。

あと一步来たらぶつかる。そんな間合いで、彼は私の目の前に座り込んだ。まるで鏡写しのよう。そしていつの間に笑顔は消えて、瞳が私と同じ高さにある。

「もし好きになつてももらえるなら、好きになつて欲しい。僕も本当のことを言うよ。」

芯を持ったその言葉は、何か意を決したことを伝えている。私を見つめる瞳から、目を離せない。身体すらも硬直したかのように思えたそのとき、私は左手に異変を感じてびくりと引つ込めようとする。けれど、しっかりと捕まえられていた。視線を移せば、彼の両手が私の右手を、掌を包んでいる。

ゆっくりと私の腕は引き上げられて、彼の方に持つて行かれた。何をするんだろう。ゆっくりと力を抜いて、彼に腕を任せる。

誘われた手が左胸に触れたとき、にこつと微笑む顔があつた。暖房がかかった保健室の中で、彼はワイシャツ一枚。その向こうには、私と同じ。全く同じ感触、高鳴る鼓動の感覚。

私と一緒に。私だけがドキドキしているわけじゃない、私だけが緊張しているわけじゃないの。

得も言われぬ嬉しさが込み上げてきて、私もお返し。にこつと笑つた。好きでも嫌いでもない、けれども。一緒にいてもいいよつて。私、ちよつと偉そうかな。

私の気持ちはきつと伝わったんだと思う。彼は笑顔を崩すことなく、迷うことなく口を開いた。私の答えは決まっている。ちよつとだけ嘘が含まれても、それは明日、本当にしてみせるから。

「あのね、僕。女の子なんだ。」

「うん。一緒にいたい。」

恥ずかしくて、ちよつと俯き気味で。視線を外すだけじゃ心許なくて、焦点までずれちゃって。身体全てで、私は本当の気持ち传达了。

……はいいい？
今なんて？

とにかく瞳の焦点を定めなおしたとき。視線を彼に戻したとき。左胸、い、い、いや、違う、あつちは右。そう、右胸。ワイシャツのボタンははずれ、右胸がはだけられていた。可愛らしい桜色の下着が、胸に当てられた右手の意味を教えてくれた。「え、ええつと、私、え、あえつと、あ、その、あー、えつと。」

ちよ、ちよつと、落ち着いて。目の前にいる彼は、私に告白して、女の子で、胸があつて。

「ごめんっ、よくわかんないっ。」

だ、だつて……。

あーっ、私の今の気持ち、ちゃんと伝わっているのかなあ。

あとがき

私はボタンと扉を閉じる、はずがない。
かっこわるいな、私。

わずかに開いた扉の隙間からは、中の様子がよく聞こえた。
周りが静かなせいもあるだろうが、私の意識が集中しているためなのだろう。声をかけられるまで隣に気付かなかったことからも、それは明らかだった。

「強がる子って、弱いから強がるのよね。」

招かれざる客の吐く言葉には、せせら笑いでも聞こえてきそうだ。確かに私は、嘲笑されても仕方のないことをしている。
しかしそれに耐えられるほど強い人間じゃない。

「でも、それは悪いことじゃないと思うわ。」

「先生もそうだから、ですか。」

「あら、津村さんは意地悪なのね。」

「先生ほどじゃありませんよ。」

私も、隣の養護教諭、小野原高子（おのはら たかこ）も。
本心を守るために言葉を投げ合う。上の空での交戦は決着のつきようもなく、お互いにとって心地よいものだった。

ごめんなさいが先か、お久しぶりが先か。
ごめんなさい。ですよね。

えっと、前作っていつでしたっけ。昨年の十月ですか。実に十ヶ月ぶりですか。怖くて前作のあとがきが読めていないのですが、多分、クリスマスにまたお会いしようとか言ってるんでしょうね。そのクリスマスを過ぎた昨年の冬コミのペーパーでは、今年は上半期に数本リリースと書いた記憶がありますね。……ホントごめんなさい。全然守れていません。ダメダメです、私。

その上、今回もとにかく時間がなくて（スタートが遅くてとも言う）、繋がり悪い展開や描写不足が山ほど……。みゅう、リリースまでにどこまで直せるかなあ。きつと完全には直りません、ごめんなさい。

気を取り直して。みなさま、お久しぶりです。今回も最後まで読んでくださり、誠にありがとうございます。こんな私の作品を見捨てずに、最後まで読んでくれたあなたは神様です。お兄ちゃんです（笑）

長年おつきあいいただいている方がいらっしやいましたら、きつとお察しのことでしょう。第一章はバレンタインデー用に考えていたものです。なのでとにかく甘くて幸せなのを書きました。その反動が第二章に来るはずだったんですが、なんかこ

っちも甘いな。キャラが僕の言うことを聞いてくれないからいけないんだっ。

ヒメとシノンとは、今まで通り、今まで以上に二人一緒に過ごしていくんだろうなあって想像できますが、裕子と伊吹はどうなるんでしょう。二人が恋人同士になるのかすら……。そうです、ねえ、伊吹に引きずられて、気付いたら手を繋いじゃって、キスしちゃって、かな。いや、意外と裕子が引つ張っていく気がしますね。本人にそうしているつもりはないけど、恥ずかしげにおねだりしている内容が変態チックだとか。

書いた私が言うのも何ですが、裕子の考えていることはさっぱりわかりません。思うに、彼女がとて「女の子」だからなんです。女の子は不思議な生き物ですから、わからなくても仕方ありません（笑）

あ、ノエルと璃紗がどうなったのかも気になりますねえ。璃紗がいやがるのにロリ服を着せられているのは想像に難くありません。そしてやっぱり璃紗の方が可愛くて落ち込むノエルを、優しく慰める璃紗。お、ちよっとお姉さんっぽいぞ。でもやっぱり、経験値不足でうまくいかないんだよねえ。うんうん。

とか妄想しないで作品にしないさい。とゆわけで、今回も懲りずに次回予告をしてお別れです。

冬までに本作のサイドストーリーを展開したいなあと思っています。そう、このあとがきの最初にちよこつと書いたのも、サイドストーリーの一部だったり。どこの場面の裏側かは、おわかりですね？ 本作は割としつかり設定したので、いろいろ展開しやすい（はず）。何とか復帰してコミック版も作ってみたいと思っています。うあ、なんて無謀なことを言ってるんだ。

昨年の夏コミで出した『ガラスの向こうのお姫さま』シリーズの完結編も書きたいなあ。核となるアイデアはできているんですが、なかなか、うまい演出が思いつかない……。なんて言っていると、あつという間に年が明けるんですよ……。

では、みなさま。また近いうちに！……？

二〇〇六年八月、冷房を効かせたいいつもの作業場にて。

セレクトティブ・チョコレート

Fukapon

2006 年 8 月 13 日 初版発行

発行所 まにふいくみやはか
印刷/製本 project KAIGO 東川口分室

Copyright (C) 2006 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>
<http://www.projectkaigo.org/>